

アンケートの結果と学会誌編集の今後について

浦 昭 二* 今 野 衛 司**

近年、会員数も増加し、その構成も従来と変わってきており、それに伴い、関心分野の様相も変わってきていると考えられるので、このたび全会員を対象に、本会誌に対するご意見を求めたが、その結果の報告を兼ねて編集幹事会の編集方針について述べたいと思う。なお今回のアンケートは、1964年に行なわれたアンケート形式に準じたので、結果報告も若干前回の結果と対比させながら行なう。

1. アンケートの回答率

会員数 5,360 名に対し、回答があったのは 219 名で回答率は 4% であり、前回同様 (前回は 7%)、よい回答率であるとはいえない。したがって、この調査結果が全会員の意見をどの程度反映するものとみるか問題があるが、少なくとも、寄せられた回答は熱心な会員の積極的な意見であることに違いはない。

2. 回答者の背景

回答者の年齢分布・専門分野・所属を第1表に示す。若い年齢層が厚い特徴は前回の調査結果と同じであるが、専門分野については、応用関係者のいちじるしい増加が目立ち、前回約 25% であった応用その他の該当者が、今回は 63% に達している。

(参考: 前回の専門分野別会員構成 数値解析 10%, プログラミング 20%, 金物技術 44%, 応用その他 25%)

3. 本学会誌に対する項目別関心および改善案

本件についての集計結果は第2表に示すとおりである。

結果は概して穏健なものであり、大方の項目について約半数は現状で可としているが、いくつかの項目については改善希望の強いものもあり、大雑把な結論をまとめてみれば、

(1) 各項目別の関心の度合いについては、大体穏当な結果であるといえるが、プログラムのページについては無関心が前回同様かなり多い。前はハードウェア関係者の回答者に占める割合が半分近くだったので、それがこの原因と解されていたが、今回の結果をみると必ずしもそういえないものがある。すなわち、寄稿者の範囲が狭い、例題的なものか非常に技巧的なものが多く実用性に富むものが少ない、数値解析的なものに傾いているなどの問題点がありそうである。編集幹事会としては、寄せられた具体的意見も参考の上、寄稿者の幅をひろげる、テーマを選んでプログラムの特集を企画する、プログラムの結果だけでなく問題提起もとり上げる、プログラムの検定・討論を含めるなどにより、プログラムのページの改善をはかって行く考えである。

(2) 件数・ページ数については、適当とする評価が、回答者の半数を占める項目が多いが、一方解説、

第1表

年	令	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~	20未満・不明	計
人	数	44	55	53	34	13	11	6	3	219
専 門	数			2	1		1			4
	学									
	ハードウェア	4	8	8	7	2	2		1	32
	ソフトウェア	6	17	16	3	2			1	45
	技術関係応用	13	12	17	15	4	3	3		67
所 属	事務関係応用	4	12	9	4	3	2			34
	その他	17	6	1	4	2	3	3	1	37
所 属	大学・研究所	2	11	14	12	3	5	1		48
	計算機/ソフト・メーカー	18	23	19	11	3	1	2	2	79
	ユーザー・その他	24	21	20	11	7	5	3	1	92

* 担当常務理事

** 担当編集幹事

第2表

		どの程度読むか				件数・ページ数				質			
		常に	興味ある時	関心なし	無回答	ふやす	適当	へらす	無回答	高級に	適当	易しく	無回答
講演	演	80	122	5	13	47	117	7	58	17	118	27	57
論	文	28	176	9	6	60	108	14	37	20	90	67	42
解説	説	72	134	3	7	92	79	3	52	10	90	72	44
講座	座	47	153	11	7	85	76	18	40	13	87	73	46
座談会	談	79	103	27	10	26	109	32	52	17	131	14	57
プログラムのページ	の	40	110	61	8	45	87	41	46	15	101	41	62
資料	料	73	123	10	13	55	100	8	56	15	110	25	69
報告	告	61	129	18	11	33	119	12	55	6	124	26	63
寄書	書	33	153	23	10	17	127	15	60	4	121	23	71
談話室	話	65	122	23	9	22	121	19	57	2	138	14	65
会員の声	の	54	115	36	14	27	118	16	58	3	123	12	71
文献紹介	紹	90	107	13	9	73	92	7	47	15	129	15	60
ニュース	ス	129	71	10	9	67	100	3	49	17	134	10	58

講座および文献紹介、ニュースについては、この順位で増加希望が多く、回答者の30%以上に及んでおり、編集幹事会として増強をはかるべく検討したい。次いで多いのが論文についてであるが、前回の調査では論文をふやすという希望が適当とする意見と同じ数だけあり、増加希望対象の第1位にあったことを考えると、この点についてはある程度要望が満たされていると考えられる。

(3) 質に関しては、論文・解説・講座をもっとやさしくという意見が回答者の1/3の数を占めており顕著な傾向であるといえる。論文についてはその性格上、ある程度止むを得ないことと考えるが、できるだけ読みやすいものにするよう執筆者に注意してもらうことは考えたい。解説・講座についてはより分りやすい形で書いてもらうよう執筆者に依頼するようにしたい。

4. 各分野についての関心配分改善案

本件についての集計結果は第3表のとおりである。

第3表

	ふやす	適当	へらす	無回答
数	47	118	37	17
学	75	99	31	14
ハードウェア	68	91	48	12
ソフトウェア	93	84	27	15
技術関係応用	67	99	36	17
事務関係応用	68	107	21	23
教育				

もっとも目立つ特徴として、技術関係応用について増強することに対する要望が強く出ていることが上げられる。これは第1表の専門別会員構成からみても自然な結果と考えられ、最近の傾向として注意すべきこ

とであらう。

5. 本会誌に対する総合的評価

本会誌に対する総合的評価の集計結果を第4表に示す。幸い“優”“良”の評価が回答者の60%以上に及

第4表

優	良	可	不可	無回答
13	126	63	14	3

んでいるので、おおむねいまのやり方が支持されているものと思われ、また前回なかった“優”の評価も若干受けたので、いままでの編集関係者の改善努力が認められてきたのではないと思われるが、一方、前回同様依然として“可”“不可”の評価もかなり多いので、編集幹事会としては大いに反省し、今後一層の勉勵の必要なのが痛感される。

なお、アンケートの回収率がよくなかったことについては、調査要領の不手際も原因の一つと考えられ、関係者としてはその不行届をお詫びしなければならない。しかし最大の原因が、本誌の現状を大旨とし、改善すべき特別の要望なしということであればあまり問題はないが、もし、本誌が意見を寄せるだけ十分に関心を払う対象になっていないということであるとすれば、その改善のためにこそご意見をいただきましたかと考える次第である。

6. その他の具体的意見

その他の具体的意見としては、アンケート回答者の約半数の方から種々の意見・助言・要望・批判などをいただいた。内容は非常に種々様々な問題に分散しているが、大体整理してみると、

(1) 会誌の基本的路線については、とり上げる分

野・範囲をひろくという意見が若干ある一方、同数程度にハードウェア、ソフトウェア、応用、あるいは理論など集中すべき目標づけを明確にという意見もある。また、研究誌にせよという意見がある一方、学術・実務を半々にという意見や執筆者が大学にかたよりすぎ同人誌的であるというお叱りもある。また情報の処理自体を扱うべしとする意見や情報化社会のあるべき姿を積極的に追求せよという意見など種々の方向に分散しており、特に多数意見が集中したものはなかったが、ただ一つ、理論面が多すぎ技術・実用面に乏しいという趣意の意見が、会誌の性格に触れた意見のうち約半数近くあったのが目立った点である。

(2) 編集のやり方については、そろそろ論文誌と会誌を分割したほうがよいという意見、ページ数の増加を求める意見、ハード、ソフトの新製品紹介に対する希望がおのおの若干名ずつあった。ほかに、月例会・研究会のページの 신설希望や大学・メーカーの訪問記事の新設、あるいは会誌の体裁に関する意見・助言がいろいろ寄せられたが、これも様々な方向に分散しており、3名以上が一致した意見は見られなかった。

(3) 応用・実用技術関係の強化を求める意見が、具体的意見を寄せられたものの1/3から出されている。事例・実験例の報告、実務応用関係、システム設計と管理方法、プログラム開発の技術と管理などについての増強要望が強く、具体的意見として、まとまった数が集中した唯一のものであり、編集幹事会として会員各位のご協力を得て今後解決すべき課題である。

(4) 特集号を勧迎する声がかかなりあったことも注目すべき点の一つであり、編集幹事会としてはより充実をはかるべく努力したい。なお、特集号の主題を記入してこられた方も若干あったが、2名以上が一致したものはなかった。

(5) 前回特に指摘されていたものに、会誌の発行遅れと、それをとりまく問題についてのお叱りがあったが、この点は相当改善されてきており、今回は、この種のお叱りがほとんどなくなったことについては、編集関係者として幸いなことと感じている。

前述のように、寄せられた意見は多岐にわたりかつ賛否両論で、すべてを紹介することは紙面の都合上できないが、編集幹事会で検討の上、ご要望にそうよう努力して行きたいと思う。

7. 編集幹事会の意見と会員各位へのお願い

以上アンケートについての集計結果を報告してきた

が、以下に編集幹事会の意見をまとめてみたい。

(1) 初めに情報処理学会誌の基本的性格について、学会の基本方針として明確にしておく必要がある。本学会の創設の直接の動機は、情報処理国際連合(IFIP, International Federation for Information Processing)が1959年に設立され、日本におけるそのmember societyとして発足したものである。IFIPが情報処理の名のもとに広範な分野を包含していると同様に、本学会も同様の趣旨で進むことが、本学会創設者たちの基本方針であったし、今もその精神に変わりはない。過去短かい年月の間に急速に広がった情報処理上の各種の問題は、あらゆる学問分野にまたがり、またInterdisciplinaryの問題も多く、多くの専門分野の人々が一つの対象について論じ合う共通の場こそ不可欠なのではないだろうか。

(2) 本会誌の内容の充実のためには、改善をはかるべき課題がいろいろあると思われる。まず、いままで比較的比重が軽く、今回多数の要望となって表われた応用面の拡充については、その要望にそうべく努めたいと考えており、応用技術関係について、論文・解説・資料・報告など形態のいかんを問わず、活発な寄稿を関係会員各位に特にお願いしたい。論文をやさしくという点についてはその性質上いろいろむずかしい問題があり、簡単に解決できるものではない面があるが、できるだけ読みやすいものにすることは発表の目的から考えても必要なことであり、この点寄稿者のご協力をお願いしたい。多くの要望があった解説・講座については増強をはかって行くことを考えており、またプログラムのページについても前述のような改善策を講じて行く考えである。また同様に増強希望の多かった文献紹介については、会員各位よりの活発な投稿を期待する次第である。

(3) 編集活動の全般的充実の一環として、関西・東北両支部との関係をより緊密にし、会員とのつながりをひろげて行くことを検討したい。

(4) 特集号については、いままで通り年2回の特集号の発行に加え、さらに年2回(72年度は1回)学会誌を半特集の形で編集することとした。

(5) 本学会誌を論文誌と会誌に分割することについては、現在尚早と考えられる。当面本誌の増ページということで充実をはかり、分割するに十分な量・内容に至った時点で考えるべく、72年度は見送りとし、検討を続けることとした。